金沢大学人間社会学域経済学類３年
栢原 歩磨

世界農業遺産国際スタディ・プログラム　研修レポート
総論

1. 参加前後の考えの変化

参加前は、地域貢献について広い意味で捉えており、漠然とした興味しかもっていなかった。どういう取り組み方があるのか、そこに関わるステークホルダーとしてどのようなものがあるのかもあまり知らなかった。しかし、能登やイタリアにおける様々な事例を視察することで、その考えは大きく変化した。

特に、震災を契機に新しい挑戦を始めたノトハハソさんの事例や、自社の甘口醤油という「食文化を守る」ために試行錯誤を続ける谷川醸造さんの姿勢から、地域の主役である人々が、困難な状況下にあってさえも試行錯誤を重ねながら行動するたくましさを感じた。

ノトハハソさんでは、震災で窯を失ったことをきっかけに上手くいくかも分からない窯を購入する挑戦や、牛のゲップを減らしてメタンを削減するために餌に炭を混ぜる取り組み、コスメブランドとの連携など、これまでにない新たな挑戦に取り組まれていた。また、耕作放棄地や相続放置地にクヌギを植えることで土地の資産価値を高め、地域資源の循環的な活用や人々の関係再生を目指す取り組みも印象的であった。これらの活動から単なる復旧ではなく、伝統を未来につなげるという姿勢に強い意志を感じた。

ノトハハソさんの事例に続き、谷川醸造さんでは、地元に根付く甘口醤油という食文化を守りながら、商談会や展示会を通して外へ積極的に発信されていた。「何を守り、何を変えるか」という取捨選択の中で、地域の味を次世代へ伝えようとする姿勢に深い感銘を受けた。

能登の事例に加えてイタリアのスカッチャ・ディアヴォリは、国全体で競争が激しい中でも、独自の工夫によって唯一無二の製品を生み出していた。このことから、「その土地だからこそできる工夫」こそが価値を生むヒントとなるのではないかと考えた。これらの事例に共通していたのは、地域の人々が自身の技術や文化に対して深い誇りを持ち、その可能性を信じていることである。この「可能性を信じる力」こそが、地域を活性化させていくうえで最も重要な要素であると実感した。

2. 本研修最大の収穫と将来の志望への昇華

本研修の最大の収穫は、この「地域の人々の可能性を信じる力」への気づきが、自分の将来働くうえでの明確な志望へと昇華した点にある。

当初は、ノトハハソさんと某コスメブランドとの連携事例を聞き、「地域と企業はこうした関わり方ができるのか」という気づきを得たに留まっていた。しかし、地域に眠る潜在的な可能性を信じる人々の姿を目の当たりにした結果、そこに自信や誇りを持つことができれば、地域の住民主体で行動を起こすようになり、グローバル化によって失われつ

つある日本の魅力やアイデンティティを後世に残せるのではないかと考えるようになった。

外部からの視点を持つ人間として、私はその地域に暮らす人々も気づいていないようなニーズや潜在的な魅力を発見する仕事がしたいと考えている。そして、愛着や誇りを育むことで、その土地らしさを維持し、日本の多様な魅力を残していくことに貢献したい。具体的には、地域の関係人口を増やし、最終的には地域住民自らが主体的となって誇りを持って地域づくりをしていけるような持続的な仕組みを作ることが、私が働くことで社会に与えたい最大の影響である。

３．イタリア研修に行った意義

今回のイタリア研修に参加したことは、私にとって非常に価値のある経験であった。その意義は大きく分けて２点ある。

１つ目は、FAO 本部でのプレゼンテーションである。この体験では、日本の祭りや神輿、神道など日本固有の文化的背景を、海外の人にも理解できるよう英語で説明する必要があり、その過程が最も苦労した点だった。単に英語に訳すだけでなく、文化の意味をかみ砕き、どのように伝えれば相手に納得してもらえるのかを何度も考え直した。言語で伝えられない所は、ジェスチャーやプレゼンスライドの図式化など、言葉以外の部分で補ったり、アイコンタクトで相手の反応を見ながら発表を行ったりとさまざまなアプローチを試みた。

さらに、グループメンバーとの意見のすり合わせも難しく、英語で一貫したメッセージを作るためには、互いの考えを深く掘り下げる必要があった。日本語であれば曖昧な表現で妥協できた部分も、英語で発表する以上、論理性と一貫性が求められたからだ。この経験を通して、英語力だけでなく、相手に伝わるように内容を構成する力や、説得力をもって発信する重要性を学んだ。その結果、FAO の職員の方からは、意見の賛同や内容の改善点、新たな視点など具体的なフィードバックをもらうことができた。この経験は試行錯誤の末に自分の考えを世界に届けられた成功体験として、達成感と自信を与えてくれた。

また、FAO 職員の方から「その伝統を残す意味は何ですか？それを残すことで地域住民にどんなメリットがありますか？」という問いを受け、自分の中の固定観念に気づかされた。これまで「伝統は守るべきもの」と当然のように考えていたが、その意義を改めて問い直すきっかけとなった。固定観念に囚われず、物事の本質に立ち返る視点を得られたことは、大きな学びであった。

２つ目は、今回の研修を通して、自分自身が「変化を楽しめること」を断定できたことである。もともと私は新しい環境に行くことが多かったが、不安や恐れからストレスを感じることもあった。しかし、イタリアでの研修を通して、自分の中にあった小さな違和感を自分のものとして自覚し、昇華することができた。今年の 3 月のアメリカ旅行の経験から、変化は楽しまないともったいないと感じるようになった。そうは言いつつも、もう

金沢大学人間社会学域経済学類３年
栢原 歩磨

一度海外へ行くことに対して不安を感じていた。しかし、今回イタリアに行き、変化は楽しいものであると思えるようになった。街を歩きながら、おしゃれで歴史を感じる建物や、人々がそれぞれの個性を尊重して生きる空気に触れ、知らない世界に飛び込み、それを知ることそのものを面白いと感じられるようになったのである。

今後は、この経験を糧に、たとえ文化や価値観が異なっていても人に何かを説明できるだけの英語力を養うとともに、国際的な場でも臆せず発信する姿勢を持ち続けたい。また、この経験は今後の学びやキャリアにも大きくつながると考えている。英語で自分の考えを伝え、それが相手に伝わった時の楽しさと力不足を感じた時の悔しさを再認識したことで、英語学習への意欲が再燃した。さらに、今まで同じだったランニングコースを変えるなど日常の小さな一歩も「やってみよう」と踏み出せるようになり、学生のうちにヨーロッパ一周の一人旅をしてみたいという新たな夢も生まれた。

将来は、転勤や海外勤務を通じて、さまざまな地域の個性や魅力を発見し、地域課題や文化を国内外に発信する仕事に携わりたいと考えている。今回の研修で培った「変化を楽しむ姿勢」や「異文化の中でも臆せず発信する力」を活かし、未知の環境や挑戦に前向きに取り組み続けたい。